

思い出写真館



あべのりこ
阿部憲子

南三陸ホテル観洋女将「みやきおかみ会」会長



3年近い苦労の末に2004年、ホテルに念願の「南三陸温泉」が開湯。くす玉を割って祝った。季節を問わず新たな魅力が加わり、地域住民にも喜ばれ、ホテルはさらに飛躍した

あの東日本大震災から来年3月で丸10年になります。震災からの復興がやっと実感できるようになった区切りの時期に、今度は予期せぬコロナ禍。「世の中も人生も甘くないな」と思い知らされますが、震災を乗り越えてきたのだから、腰を据えて今度も乗り越えられる、と自分に言い聞かせる日々です。そんな時、写真とともに過去を振り返り、「原点」に戻って励みにしたくなります。震災時はまさに無我夢中でした。2次避難所として被災住民、ボランティア、工事関係者らを受け入れ、最大時は約1000人にも。限られた食材や水を分け合い、交流会や音楽ライブ、図書コーナー、子どもたちの学習支援の「寺子屋」「そろばん教室」など、様々なイベントにも取り組みました。掲載写真は震災半年後、避難していた人々が仮設住宅に移るため、ホテルを引き払う際に開いてくれた「感謝の集い」です。サプライズだっただけに感激しました。

営業再開後には、初めて町を訪れたお客様に津



災害時は住民にも活用してもらおうと、父が震災前に取り付けた自宅のらせん式の外階段。震災では20人の命を救い「命のらせん階段」として震災遺構とした



震災から半年後、ホテルで避難生活をしてきた被災住民が仮設住宅に移る際、ホテルへの「感謝の集い」を開いてくれた。嬉しいサプライズで感激した。前列中央、花束を掲ぐのが私

波跡地を見て「ここは元々野原だったのですか？」と尋ねられたのにショックを受け、震災を伝承する「語り部バス」の運行を始めました。2011年5月から、これまでに延べ39万人を案内しています。被災地の誰もが語り部、体験を伝えることは命を守ることに繋がります。防災教育の視点から当ホテルを利用した修学旅行も700校を超えました。本日に「千年に一度の震災は千年に一度の学びの場」だと思います。

父が設置した美家の「命のらせん階段」も、大切なひとコマです。南三陸生まれの父は禪一貫、魚の行商から始め、1960年のチリ地震津波で被災した後に気仙沼に拠点を移し「阿部長商店」を設立。仲買業、冷凍冷蔵庫業、水産加工業、この南三陸と気仙沼のホテル観洋などの観光業と事業を広げました。南気仙沼にあった3階建ての自宅にらせん階段を外付けしたのは震災の5年前。チリ地震津波のつらい体験から、周囲に高台がない地元住民にも災害時に活用してもらおうと思いつき、住民対象の避難訓練も3回行う念の入れよう。その甲斐あって震災では、住民20人がこの階段から屋上に避難し助かりました。今は「震災伝承施設」の登録を受け、保存しています。

震災前の父にまつわる思い出に、温泉の掘削があります。1972年にホテルを開業、観光業に乗り出した父にとって、季節を問わず魅力が高める温泉は長年の夢でした。地震や津波に強い岩盤の上に建てたことが震災では功を奏しましたが、温泉には難物。3年近い挑戦の末に2004年の

開湯をきっかけに3本の温泉を掘り当てた時の喜びはひとしお、大々的に開湯を祝いました。

昨年、87歳で逝った父は決してあきらめない人、常に前を向いてがんばり通す人でした。その心を長女の私は多少なりとも受け継いでいるようです。25歳で女将になった私は、ずっと父の背中を見てきました。学んだのは「念すれば天まで通す」の信念でしょうか。

旅館業、観光業はとても「すそ野」が広い。おもてなしだけでなく、地域経済を支える原動力にもなっています。私のホテルも従業員2200人の雇用の受け皿となり、様々な業種の取引先も百数十社に上ります。危機的だった震災直後も、地元の人材を流出させたくないと例年通り新入社員を採用しました。地場企業も浮揚策に必死です。例えば、南三陸のA級グルメ「南三陸キラキラ丼」も、実は震災前に「食で町おこしを」という思いから発案しました。海の幸や太陽や人の表情の輝きをイメージし、女性や若者にも親しみやすいよう「キラキラ」と名付けました。

今回のコロナ禍は何とも厄介です。ガイドライン通りに感染防止策を講じながら営業を続けておりますが、経営は厳しく先が見えにくいです。ホテルの女将たちで作る「みやきおかみ会」の会長を務めて2期目、みなさんの苦労がよくわかります。ただ、震災も乗り越えてきた私たちはしなやかで粘り強い。東北の魅力や最大限生かし、業界あげて力と知恵を出し合ってコロナ禍にも立ち向かって参ります。